

～「縮小造林」政策の文脈から～

持続可能な森林経営とバイオマス利用

2014年2月20日

環境・エネルギー部

相川 高信

aichu@murc.jp



三菱UFJリサーチ&コンサルティング

持続可能な森林経営？

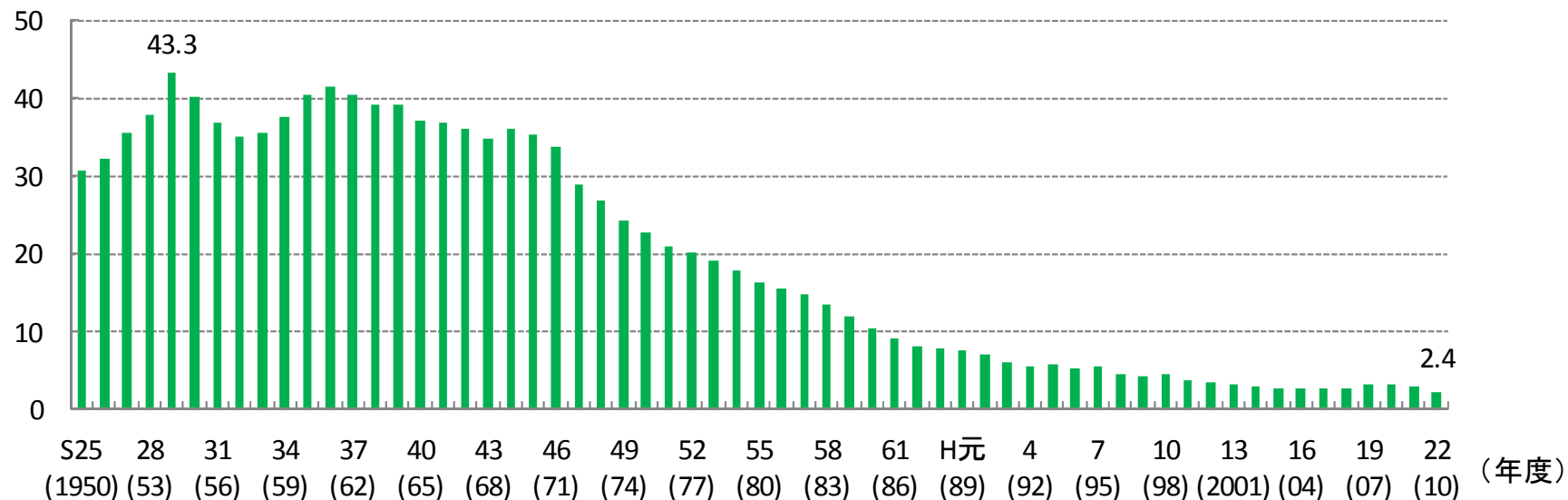
この絵の意味することは？



(出所) 第5回 森林・林業基本政策検討委員会資料

人工林が多すぎる

拡大造林面積の推移



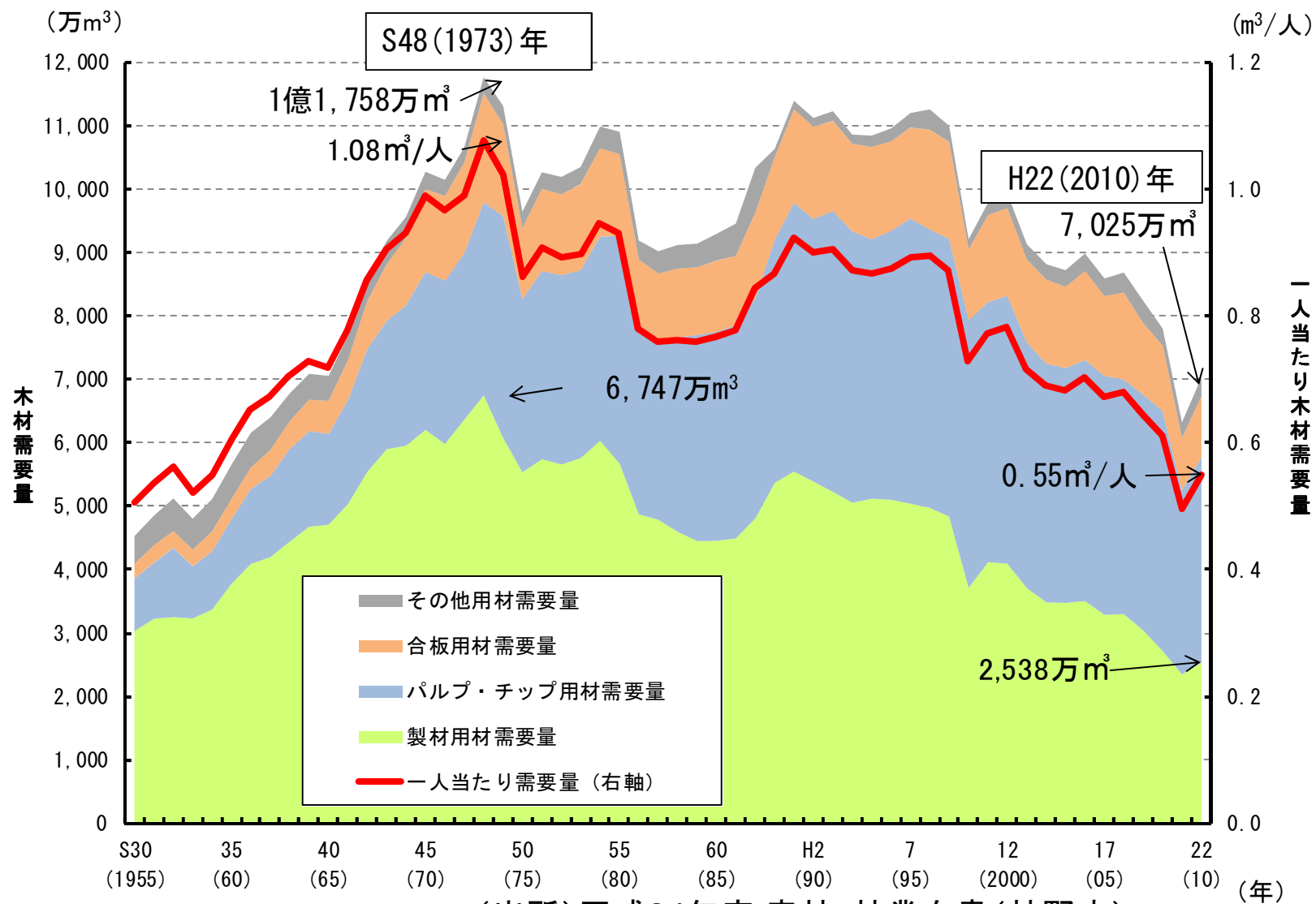
(出所) 森林・林業白書より作成

これまで策定された木材需要量の見通し

策定時期	1965	1973	1980	1987	1996	(2011)	
見通し年次	1975	1981	1996	2004	2015	(-)	
長期見通し (100万 m ³)	需要量	100	134.8	133.2	104-108	119-126	(72.7)
	国産材供給量	70.6	49.7	57.7	45-52	36-40	(19.4)

(出所) 「21世紀を展望した森林・林業の長期ビジョン」森林基本計画研究会編(地球社1997)

木材需給の移り変わり

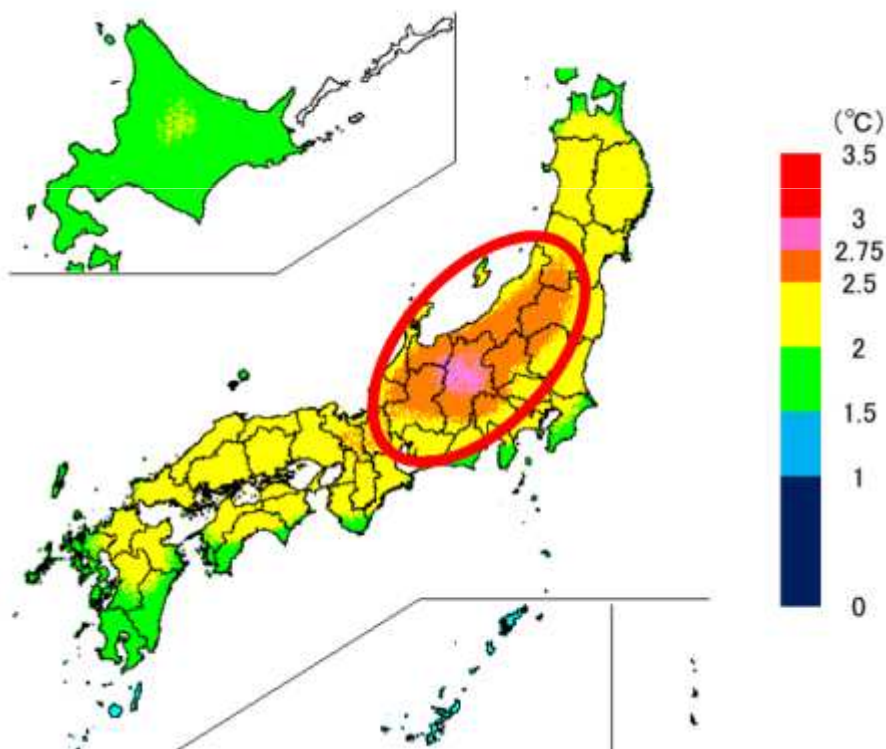


(出所) 平成24年度 森林・林業白書 (林野庁)

気候変動リスクの顕在化

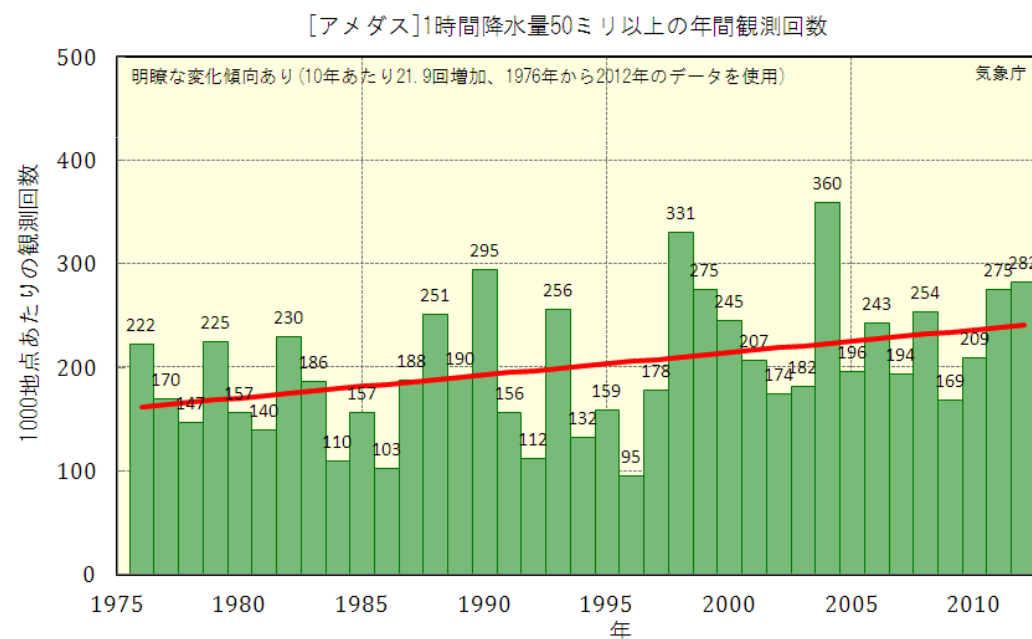
- 森林生態系の取り扱いには不確実性が内在。温暖化の影響を回避するためには、リスクを最小化する努力が必要

2050年までの気温の変化予測



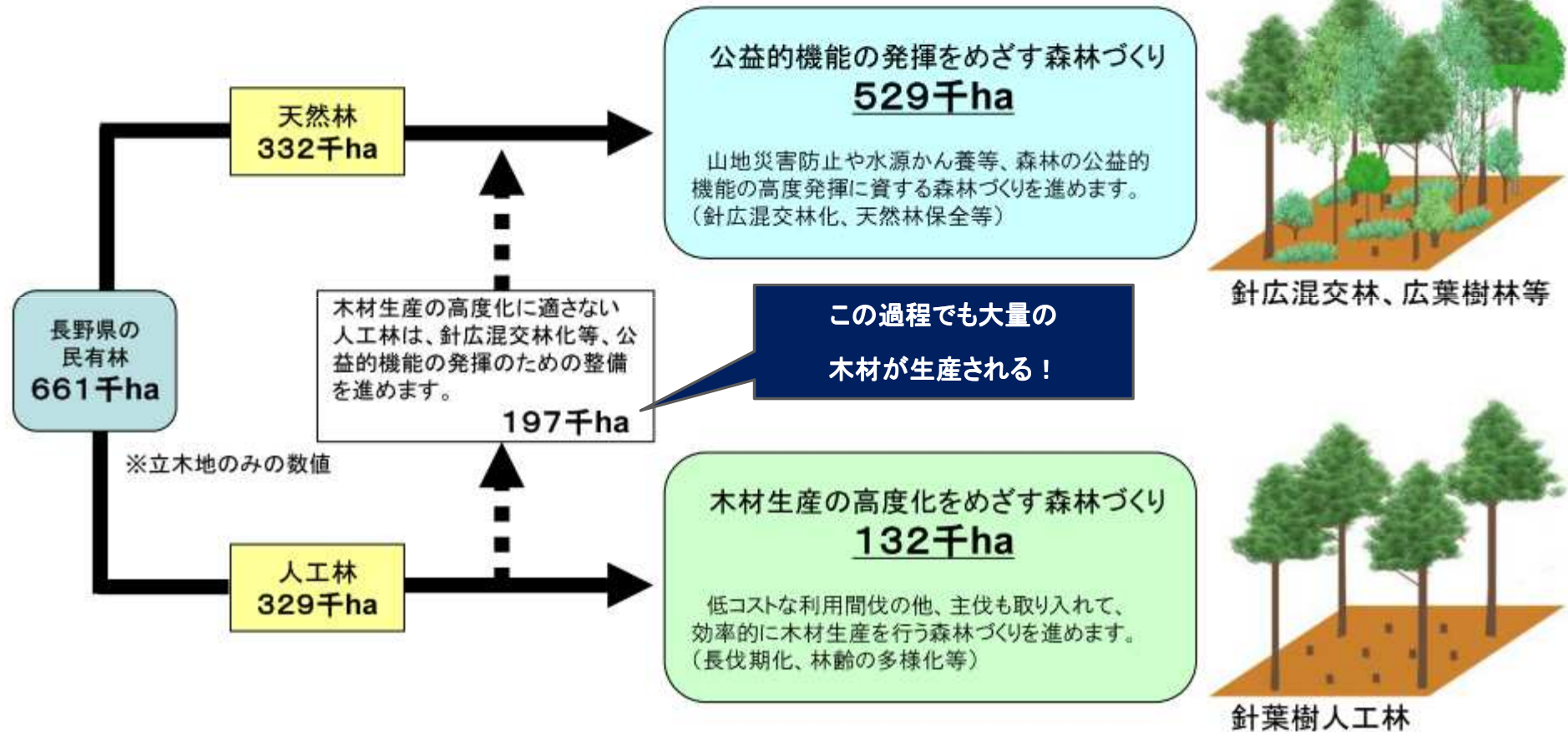
(出所)「国土の長期展望(中間とりまとめ)」国土交通省

1時間降水量50ミリ以上の年間観測回数



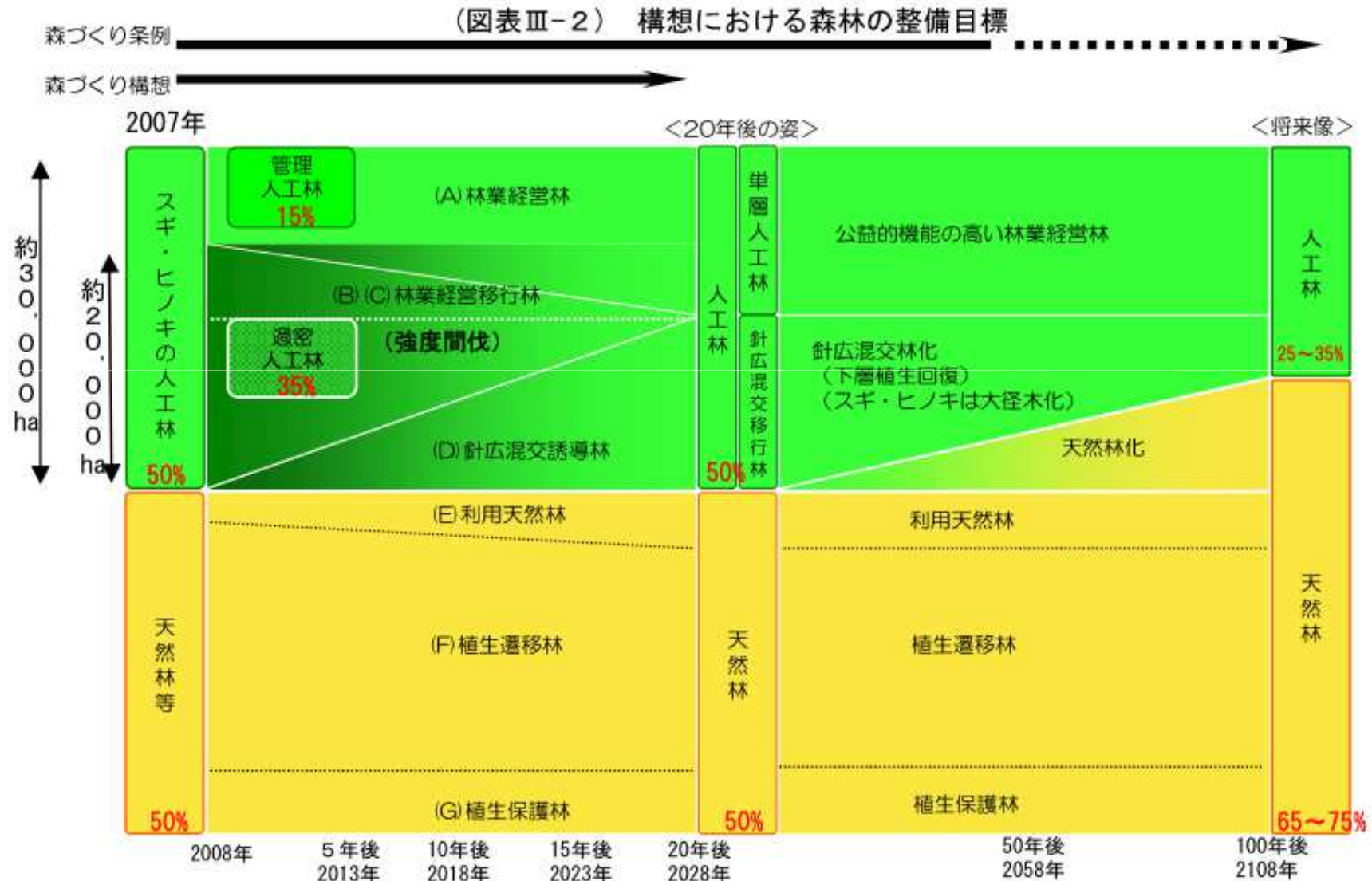
(出所)「アメダスで見た短時間強雨発生回数の長期変化について」気象庁

縮小造林政策の例：長野県の森林づくりの長期的指針

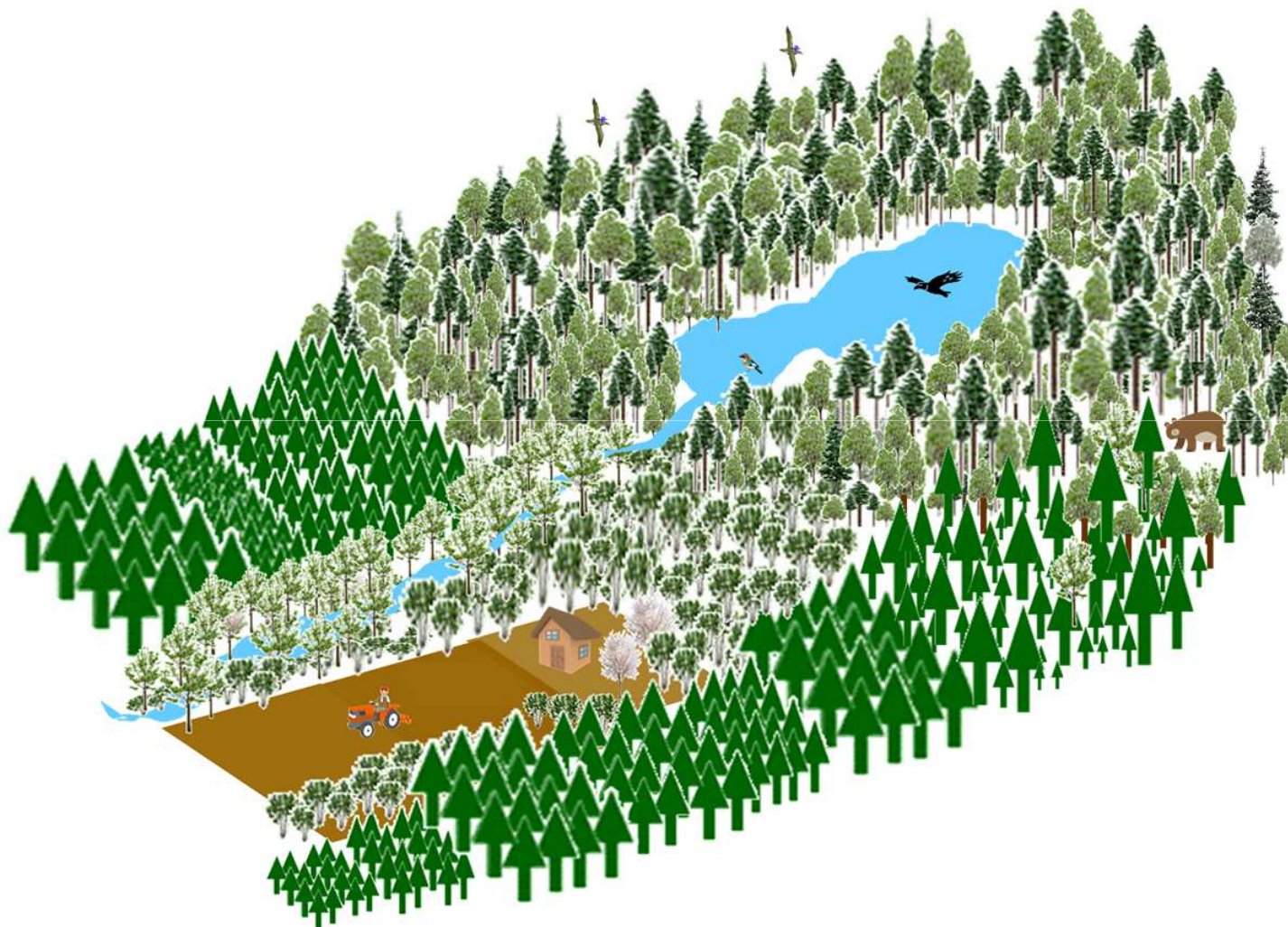


(出所)「長野県森林づくり指針の概要」

縮小造林政策の例：豊田市の100年の森づくり構想



持続可能な森林経営＝健全な生態プロセスの確保



(出所) 森林施業プランナー研修テキスト

真の論点は何か？

- 日本において、国土レベルで、持続可能な森林経営を構想すると、戦後50年間で約2倍の面積になった人工林の面積を、再び適正な水準に戻していく必要がある。
- ゾーニングは本来、そのような配置の目標林型の観点から構想されるべきであり、立地ごとに健全な生態系プロセスを確保することが原則になる。
- このような「縮小造林」政策のプロセスは数10年に渡り、その間に、大量の木材が供給されることになる。
 - 「経営的」林業と、「環境・社会的」林業の違い
- このような材を有効利用するために、バイオマス等の低質材需要は重要。
 - ただし、エネルギー効率が低くてよいということではない
- 持続可能なエネルギーシステムを求める観点からは、このような長期的かつ総合的ビジョンと戦略を内包させるべく、林野行政と対話を続けるべき。